



女性懇談会 福島第一原子力発電所を視察

KAKKIN 女性懇談会は4月18日、東京電力福島第一原子力発電所（福島県大熊町、双葉町 以下、発電所）を視察しました。

はじめに同発電所では常時4000～4500人が働いていること、主な3つの作業（燃料の取り出し、燃料デブリの取り出し、汚染水対策）に取り組んでいることなどの説明を受けました。その後、入構証と線量計を受け取って発電所構内に入りましたが、現在、発電所構内の96%のエリアが特別装備なしで往来できるまでに放射線量が下がっています。私たちも普段着のままでした。



女性懇談会メンバーの皆さん

■燃料取り出しへ作業進む（写真は全て東京電力HPより）



最初に1～4号機の原子炉建屋が見渡せる高台から、廃炉作業を視察しました。使用済燃料プールからの燃料取り出しに向けて、1号機付近では建屋全体を覆う大型カバーの設置作業が、2号機の建屋の周りでは、作業構台の設置作業が行われていました（3、4号機の燃料取り出しは完了済）。

また最も困難な作業の一つである燃料デブリ（溶け落ちた核燃料）の取り出しについ

ては、遠隔操作ロボットなどを使って内部状況を把握する調査を行っており、担当者は「2023年度に2号機の燃料デブリの試験的取り出しを目指す」と話していました。

（写真は1号機）

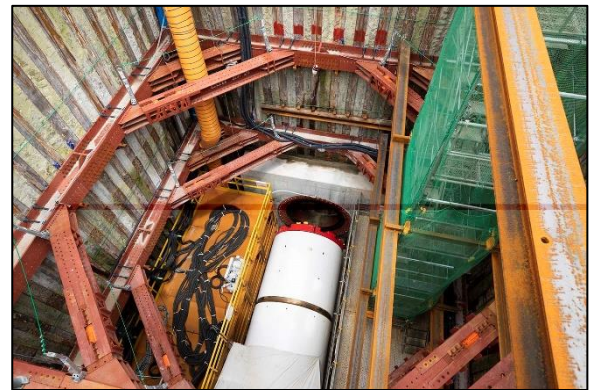
■処理水の海洋放出を準備

発電所南側には巨大なタンク群がありました。これは高濃度の放射性物質を含む水を多核種除去設備（ALPS）で浄化処理し、トリチウム以外の放射性物質を取り除いた「処理水」を貯蔵しているものです。タンクはすでに約1000基に達し、限られた敷地でこれ以上増やすと、廃炉作業に支障が出るため、今夏頃までにこの処理水を海に放出することになっています。

計画では処理水を海水で薄め、トリチウム濃度を1500ベクレル未満にして、まもなく完成する海底トンネルを通し、約1km先の放水口から30年程度かけて少しずつ海に流します。この際のトリチウム濃度は国の基準6万ベクレルの40分の1、世界保健機関（WHO）が定める飲料水ガイドラインの1万ベクレルの7分の1程度で、科学的に環境や人の健康に影響が出るレベルではないとのこと。



処理水タンク



海底トンネルの工事



ヒラメとアワビの飼育

また構内では、通常の海水を入れた水槽とALPS処理水を混ぜた海水を入れた水槽で、ヒラメとアワビを飼育し生育状況を比較しています。これまでの飼育で、生育への影響やトリチウムの生体内での濃縮は確認されていません。

■現地視察で理解が深まる

今回、防護服姿の人を見ることもなく、構内は一般的な発電所の印象でした。その一方で、燃料デブリの取り出しや処理水の処分など、世界でも前例のない困難にして長期にわたる作業が進んでいることをあらためて理解することができました。また処理水の海洋放出による風評被害が発生しないよう、懸命な努力をしていることが印象的でした。やはり百聞は一見に如かず。ぜひ多くの人に現地を見てもらいたいと思います。